『 On-line みんなで法華経を学ぼう！ 』 vol.12

Mar.2023

―― Let's embark on a journey to discover our own "perspective on the Lotus Sutra".

（みんなで"法華経観"を見つける旅に出よう）

『妙法蓮華経　化城諭品（けじょうゆほん） 第七』　（迹門（しゃくもん）・正宗分（しょうしゅうぶん））

○『又如來の滅度の後に、若し人あって妙法華經の乃至一偈・一句を聞いて一念も隨喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』　（法師品　二〇二頁 終五行）

○『其の習學せざる者は　此れを曉了すること能わじ』　（方便品　八十二頁 四行）

○ 「習学」の３つのステップ「聞解（もんげ）・思惟（しゆい）・修習（しゅしゅう）」

（『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』）（法師品　二〇九頁三行）

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』　（法師品　二〇九頁 三行）

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、りっぱな精進といえる』　（『新釈法華三部経　第一巻』　P8・8行／P5・1行）

※ 表記　例：(P353・1行／P259・7行)　⟹　（『新釈・文庫版』頁数／『新釈・単行本』頁数）

◇　◇　◇

＜授記品の復習＞

・法華経は授記の経　(P157・1行／P117・1行)

・授記の本意と受けとりかた　(P159・終4行／P118・終2行)

第一に、お釈迦さまはいつの場合でも**「あなたは仏である」とはおっしゃらないで、「あなたも仏になれる」とおっしゃっています。**

第二は、「仏になれる」ということを**自分だけの喜びとせず、最終的に「世の中の全ての人々を幸福にする」という受け止め方**をすることが大切なのです。

第三に、なぜ「名指し」を仏さまにしていただいて「お前は確かに仏に成れる」と言ってもらいたいのか。～　仰ぎ慕（した）ってやまない**お釈迦さまの「ことば」として伺った時、単なる「理解」を超えた大きな力となって、我々を立ち上がらせる**のです。～　**〈信〉**という字は、ご覧のように**亻**（にんべん）に**言**（ことば）と書きます。このことにも示されているように、**ことば**というものは、**信**を作るうえにはなくてはならぬものなのです。

・「解信行」の真の信仰は、力がある　(P164・2行／P121・終行)

「理解」したことが**「信」**となり、それが「人のため世のために尽くす**行動**」へと展開して行って、**はじめて「信仰」と言える**のです。

※ （「行」⇒「信」⇒「解」も大切だが・・・）「解」⇒「信」⇒「行」 の真の信仰には「力」がある。

・ことばの力　(P166・4行／P123・6行)

心のなかで思う言葉が「精神」となり、「思想」となり、「信」となって、「自分」を作り、自分を動かします。同様に、声として発する**「言葉」は「人をつくり」「人を動かし」ます。人を「生かしも、殺しも」します。**

・如来の十号　(P169・6行／P125・終行)

①如来(にょらい)真理の体現者／　**②応供**(おうぐ)供養の対象者、尊敬に値する（尊敬されるに相応しい人）／　**③正徧知**(しょうへんち)智慧が全てに行きわたり（自分自身のみならず、人々に対しても智慧を行き渡らせることが出来る）／　**④明行足**(みょうぎょうそく)智慧と実践の両面を備え（言行一致）／　**⑤善逝**(ぜんぜい)悪事をせず、善事を行い、迷いから離れ（常に善行を実践）／　**⑥世間解**(せけんげ)世間の成り立ちが判り、様々な境遇の違いを見分ける力を持ち（世の中や相手のことをよく知り）／　**⑦無上士**(むじょうじ)この上ない完全な人格を備え／　**⑧調御丈夫**(じょうごじょうぶ)自身の内外の魔に打ち勝ち、どんな人をも自由に教え導くことができ／　**⑨天人師**(てんにんし)天上界・人間界の大導師（世の多くの人々を導くリーダー）／　**⑩仏・世尊**(ぶつ せそん)最高の真理を悟り、この世で最も尊い存在。（安穏で円満、生々溌溂とした人生を歩む完成者）

・正法・像法・末法　(P172・2行／P127・終行)

	教	行	証
正法	○	○	○
像法	○△	○△	×
末法	△	×	×

〈正法〉　仏の教法が正しく行われ、教・行・証がそろっている時代

〈像法〉　教えと行が形式で残るが、教と行があって、**証のない**時代

〈末法〉　教えだけが残り人々が見失い、**行と証が失われた**時代

・魔・魔事　(P174・終2行／P130・4行)

『魔事あることなけん。 魔及び魔民ありと雖も皆佛法を護らん』　(一四四頁 二行)

「魔」というのは、～ **第一は『身内**(しんない)**の魔』**であって、われわれの**潜在意識に巣くっている迷い**の集積や、正しい心をかき乱そうとする衝動や**邪**(よこしま)**な思い**です。

第二は『身外(しんがい)**の魔』**であって、外部から加えられる**誘惑・圧力・非難・妨害・脅迫**などです。ところが、**〈悪に強きは善にも強い〉**。という言葉もあるように、～　こういう人たちがガラリと変わって、**その強い力を仏法の守護に用いるようになる**のです。

仏の教えを**「正しく信じ」、「正しく実践」**していけば、**必ず〈魔事〉はなくなります。**

⟹　これが**本当の「魔事なし」、「まじない」**なのです。

・調柔な心　(P184・終3行／P138・1行)

『其の心調柔にして 大神通に逮び』　(一四四頁 終行)

調(じょう)というのは、心がよくととのっていること。～　すべての点においてすぐれ、円満にバランスがとれていることです。**柔**(にゅう)というのは、やさしくてやわらかなこと。すなわち**慈悲と寛容**をかねそなえていて、人あたりがたいへん**柔和**(にゅうわ)なことです。～　仏道をひろめるうえにも、実生活上で衆（しゅう）をひきいていくうえにも、じゅうぶん心すべきことであります。

・我が深心を知らしめして　(P187・1行／P140・1行)

『若し我が深心を知しめして 授記せられば 甘露を以て灑ぐに 熱を除いて　清涼を得るが如くならん』　(一四五頁 終三行)

もし、私どもが心の奥底で決定（けつじょう）していますことをお察しくださり、**『おまえも仏に成れるぞ』**と**『成仏の保証』**をお授けくださるならば、そのお言葉を頂くことができるならば、私どもは甘露（かんろ）が注がれて全身の熱が取れ、すがすがしく満ち足りた心持ちになれます。どうかお願い申し上げます。

・大王の膳の譬え （P190・6行／P143・1行）

『願わくは我等に記を賜え 飢えて教を須って食するが如くならん』 （一四六頁 五行）

絶対の信頼を捧げているお釈迦さまから、個人的に「お前は大丈夫だよ」と言って頂けば、それで自身が固まるわけです。 よし！ という決定（けつじょう）が生ずるのです。

・修行の三要素 （P199・6行／P149・終5行）

1.「よいことを」、2.「心をこめて」、3.「繰り返す」。 この三要素がそろわなければ、**よい結果はあらわれません。**

『四悪道の地獄・餓鬼・畜生・阿修羅道なく、多く天・人あらん』 （一四九頁 六行）

「憤怒」（ふんぬ／地獄）**・「貪欲」**（とんよく／餓鬼）**・「無智」**（むち⇒目先の事だけにとらわれて追い回す／畜生）**・「利己」**（りこ／修羅）**という四つの悪徳**が圧倒的な勢力を持つことなく、人の心はおおむね平正（びょうじょう）であるか、あるいは常に歓喜に満ちている明るい世界です。

⇒ これは、凡夫が**過去に積んできた業の善悪の程度によって生まれ変わっていく世界**を指す場合と、**人間の心のなかの状態**を説かれた場合と、二通りありますが、ここでは後者をさしているとみるべきでしょう。

◇ ◇ ◇

＜化城諭品のあらすじ＞

【はるか昔の大通智勝（だいつうちしょう）如来について】――

【一五三頁 一行】 **世尊**は諸々の比丘たちに向かって、こう話しはじめられました

「考え及ぶことができないはるか遠い昔、**『大通智勝・だいつうちしょう如来』**という仏がおられました。国は**『好成・こうじょう』**、時代は**『大相・だいそう』**と言いました。この**大通智勝如来**が入滅されてどれほど前の昔のことかと言いますと・・・。

【はるか昔の年月の長さを譬える】――

【一五三頁 四行】 たとえば三千大千世界の全ての国土（星）を磨（す）り潰（つぶ）して細かな墨（すみ）の粉のようにしたとしましょう。それを全部持って東へ向かって虚空（宇宙）を飛んで行き、千の国土（星）を通り過ぎた時にその細かな粉の一粒を落としたとします。そしてまた通り過ぎて再び千の国土（星）を通り過ぎると次の一粒を落とします。そしてまた千の国土（星）を通り過ぎたら次の一粒を落とす。これを繰り返し続け、最後の粉粒（こなつぶ）を落とし、すべての粉が無くなるまでに一体どれだけの国土（星）を通らなければならないでしょうか？ 皆さんには計算できますか？ おそらくは賢明な数学者でもその数を知ることはできないでしょう。如何でしょう」

【一五三頁 終二行】 すると**比丘たち**が一斉に答えました。

「それは絶対にできません。算出できません。世尊よ。それは不可能です」

【一五三頁 終二行】 **世尊**は話を続けられました。

「それでは、その粉を一つずつ落とした国土（星）と落とさなかった国土（星）を一緒にまとめたとします。つまり通過した全ての国土（星）を全部集め、それを全て砕（くだ）き再び墨の粉のように磨（す）り潰（つぶ）します。そしてその一粒を一劫（いっこう）という年月だとしますと、全体でどれほど長い年月になりましょう？」

【一五三頁 終行】「じつは**大通智勝・だいつうちしょう如来**が入滅してから今日（こんにち）までの年月というのは、その粉の数の年月よりももっと長い、人間の頭脳ではとても考えられない遥（はる）か昔、久遠（くおん）の昔のことなのです。そういう遥か遠い過去のことではあっても、／（『我如來の知見力を以ての故（ゆえ）に、彼（か）の久遠（くおん）を觀（み）ること猶（な）お今日（こんにち）の如し』） 私は如来の智慧の力によって**大通智勝如来**がどのようにして悟りを得ることが出来たのか。さらにはその時の声聞・菩薩たちがどのようにして悟りの境地に達したのかという『**久遠の昔**』の出来事を、私は今日（こんにち）のように見ることができるのです。**【（偈）一五四頁 終二行】**（『佛智は淨（きよ）くして微妙（みみょう）に 無漏（むろ）無所礙（むしょげ）にして 無量劫を通達（つうだつ）す』） つまり、仏は一点の迷いもなく、またなにものにも妨げられることもなく、無限の過去を明らかに見通すことができるのです」

【大通智勝如来が悟りを得る直前に自らの『煩悩』と戦う】――

【一五五頁 一行】 **世尊**は言葉を続けられました。

「**大通智勝仏**の寿命は五百四十万億那由多劫（まんのく なゆた こう）という長い期間でした。その仏が仏に成る前、悟りを開くために金剛座で瞑想（めいそう）を続けていました。／（『魔軍を破（は）し已（おわ）って、阿耨多羅三藐三菩提を得たもうに垂（なんな）んとするに、而（しか）も諸佛の法（ほう）現在前（げんざいぜん）せず』） そして押し寄せて来る『**魔の軍勢**』を全て打ち破り、もう少しで真の悟りを得るところまで達するのですが、どうしてもあと一歩というところが難しく、これまでの諸仏が悟られた『真理の法』が、なかなか自身の体と心の中で体現できませんでした」

「**大通智勝仏**はさらに、一小劫（しょうこう）ないし十小劫という長い期間、結跏趺坐（けっかふざ）して心を揺（ゆ）るがすことなく禅定（ぜんじょう）を続けましたが、それでもなかなか法を悟ることはできませんでした」

【大通智勝如来の“悟り”を諸天善神が助ける】――

【一五五頁 四行】 **世尊**は言葉を続けられました。

「ところが『**忉利天（とうりてん）**』（三十三の諸天善神がいる世界）という天上界の諸天善神が、かつて『**大通智勝仏**』のために高さが一由旬（いち ゆじゅん）という大変高い獅子（しし）の座を菩提樹下に設（もう）けていました。そして・・・」

【一五五頁 六行】「**諸天善神**は巨大な座に**大通智勝仏**を招き、こう申し上げました。『どうぞこの座にお着きになってお悟りを得てください』とお勧（すす）めしたのでした」

【一五五頁 六行】「すると**大通智勝仏**はその招きを受け、着座しました」

【一五五頁 七行】「すると梵天王（ぼんてんのう）およびその他の諸天善神は、**大通智勝仏**の周囲、百由旬（ゆじゅん）という広大な範囲に美しい花々を散じ、そののちその花々が萎（しお）れてくると、芳（かぐわ）しい香りの風を吹かせて萎（しお）れた花々を払い、そしてまた新しい花々を降らせるのでした。こうして十小劫という大変長い期間、仏を供養し、ついには

仏が悟りを得られ、お亡くなりになるまで続けたのでした。／（『四王の諸天、佛を供養せんが爲に常に天鼓（てんく）を撃（う）つ』）さらに**『持国天**・じこくてん、**増長天**・ぞうちょうてん、**広目天**・こうもくてん、**毘沙門天**・びしゃもんてん**』**の四天王たちが天の鼓（つづみ）を打ち、その他の神々が美しい音楽を奏（かな）でて、同じく十小劫という長い期間、仏を供養し、仏が悟りそしてお亡くなりになるまで続けたのでした」

【一五五頁 終二行】「諸々の比丘たちよ。**大通智勝仏**はそれからまた十小劫のあいだ禅定を続け、その結果ついに諸仏と同じ最高の悟りを体感し、仏の智慧を得たのでした」

【大通智勝如来の子・十六王子の話】――

【一五六頁 一行】「じつは**大通智勝仏**がまだ出家をする前は国の太子で、すでに十六人の王子がいました。長子（ちょうし）の名は**『智積**・ちしゃく**』**と言い、王子たちは珍しいおもちゃなどを所有して、何ひとつ不自由のない恵まれた人生を送っていました。しかし父王が仏の悟りを得られたことを知ると、自分たちも仏のもとに行って出家して修行をしようと考えました。／（『皆（みな）所珍（しょちん）を捨てて佛所に往詣（おうけい）す』） そして恵まれた環境を打ち捨てるように大好きなおもちゃを投げ捨て、家をあとにしたのです。すると母親や乳母（うば）たちは泣き悲しみ、可愛い子どもたちとの別れを惜（お）しんだのでした」

【一五六頁 四行】「すると十六人の王子の祖父であり、**大通智勝仏**の父である『**転輪聖王**・てんりん じょうおう』は多くの家臣や民衆を引き連れて**大通智勝仏**のもとへ赴（おもむ）いたのでした。そして我が子であった仏を敬い、讃歎し、仏の足元に跪（ひざまず）き、仏の足に額をつけて礼拝しました。さらには仏の周囲をグルグルまわるという尊敬の念を表す作法を行い、そして正面に座し、**大通智勝仏**を一心に合掌して仰ぎ見、仏を讃歎する偈（げ）を唱えたのでした」

【父王・転輪聖王（てんりんじょうおう）**や十六王子たちが、大通智勝如来を讃歎する偈】――**

転輪聖王（てんりん じょうおう）や十六王子をはじめ多くの者たちが、讃歎の偈を唱えます。

【（偈） 一五六頁 八行】「人々を感銘させずにはおれない大威徳（だいいとく）を具えている世尊よ。あなたは計り知れない悠久（ゆうきゅう）の時を費やして修行し、今世ついに悟りを得て仏と成られました。ああ、何と素晴らしいことでしょう。尊くめでたきことこの上ありません。世尊こそこの世に類（たぐい）稀（まれ）なお方です。ひとたび端座（たんざ）すれば十小劫の長きにわたって身じろぎひとつせず、み心は常に静かで利己心から離れ、心が散漫（さんまん）にならず、心の乱れは一切生じません。そして究極の悟りを得たために、あらゆる迷いから離れた安穏な境地に安住しておられます。今、世尊が安らかな仏の境地に達せられたのを拝見して、私どもは大きな利益（りやく）を得ることができます。誠に賞賛と喜びの思いでいっぱいです。本当に嬉しく有難いことです」

【（偈） 一五七頁 一行】さらに讃歎の偈が続けられます。／（『衆生は常に苦悩し 盲冥（もうみょう）にして導師なし』）「衆生は常に苦悩しています。人々は物事の本質を見ることが出来ず、また正しく導いてくれる師もいないために**『苦を滅する道』**を知りません。／（『解脱を求むることを知らずして 長夜（じょうや）に悪趣（あくしゅ）を増（ま）し 諸天衆を減損（げんそん）す』） さらには本当に苦から抜け出そうとする心さえ起こさなくなっています。ですから智慧を持たずに欲に満ちた人生を歩き、明かりを持たずに闇路（やみじ）を歩くような苦の人生を

送っています。安らかな喜びを持つ人、善き人々もいなくなってしまいます。**【(偈) ー五七頁 三行】**（『冥（くら）きより冥（くら）きに入（い）り 永く佛の名（みな）を聞かず』） ですから心はさらに堕落していき、貪り・怒り・本能の赴くままの愚かな行動**(貪・瞋・痴)**を繰り返す日々を送るのです。そしてついには闇から闇へとさまよう人生を歩き、仏の尊い名前すら聞くことも無くなります。**【(偈) ー五七頁 三行】**（『今佛（いまほとけ）最上（さいじょう） 安穏（あんのん）無漏（むろ）の法を得たまえり 我等及び天・人 これ最大利を得たり 是（こ）の故に咸（ことごと）く稽首（けいしゅ）して 無上尊に歸命（きみょう）したてまつる』） しかし、いま仏は最高の悟りを得られました。こんな有難いことはなく、我々は心から仏にひれ伏し帰依申し上げるのです」

【(偈) ー五七頁 六行】「その時、**大通智勝如来**の弟子となった**十六人の王子**は偈を唱えて仏を讃え、そして仏にお説法くださるようお願いしたのでした」
【(偈) ー五七頁 七行】「世尊よ。ここにいる者たちは尊い法を頂くことによって安穏の境地を得ることができましたので、教えを聴聞する心の姿勢ができております。どうぞ天上界・人間界の者たちを憐（あわ）れと思し召し（おぼしめし）て、／（『諸天・人民（にんみん）を憐愍（れんみん）し饒益（にょうやく）したまえ』） 我々に尊い利益（りやく）をお授けください。世尊と等しい尊いお方はこの世におられません。しかも世尊は、数多くの徳分と荘厳な徳相、そして無上の智慧を具えておられます。どうか世の人々のために法を説いて衆生をお救いくださり、それぞれの者たちの機根に応じて法を説き分け、仏の智慧をお授けください」
【(偈) ー五七頁 終二行】「もし私たちが仏の悟りを得ることができるならば、きっと多くの衆生も同様に悟りを得ることができます。／（『世尊は衆生 深心（じんしん）の所念（しょねん）を知り 亦（また）所行（しょぎょう）の道（どう）を知り 又（また）智慧力を知（しろ）しめせり』） 世尊は我々が何を願い、何を考えているのか、私たちの心の奥底にある意識や、私たちが一体何を行動し、何を為（な）そうとしているのか、そして人それぞれが具えている智慧の段階を世尊は知り尽くしておられます。／（『宿命所行（しゅくみょう しょぎょう）の業 世尊悉（ことごと）く知（しろ）しめし已（おわ）れり』） そればかりか私たちが前世においてどのような行いをしてきたのかを、世尊はことごとく知っておられます。ですからどうか我々一人ひとりにふさわしい説き方で、最高無上の教えをお説きください。お願い申し上げます」

【大通智勝如来が悟りを得た時に起きた『奇瑞(きずい)』】――
【ー五八頁 三行】 **世尊**は続けて諸々の比丘たちにお告げになりました。
「**大通智勝仏**が悟りを得た時、**十方**の五百万億の諸仏の世界は感動に打ち震（ふる）え、太陽の光が及ばぬ十方世界の中心にある暗い場所にも光が照らし出され、すっかり明るくなりました。／（『其（そ）の中の衆生各（おのおの）相見（あいみ）ることを得て、咸（ことごと）く是（こ）の言（ことば）を作（な）さく、此の中に云何（いかん）ぞ忽（たちま）ちに衆生を生ぜる』） そしてそこにいた多くの衆生はお互いに顔を見合わせ、**『今まで自分一人しかいないと思っていたのに、こんなにも多くの人がいたのか』**と驚き感嘆（かんたん）しました。また、その国の天上界の神々の宮殿にある最上の梵天（ぼんでん）の宮殿までもが感動で打ち震い、さらに数倍輝かしい光に包まれ、世界中が普（あまね）く照らし出されました」

【東方世界で起こった『奇瑞』と梵天王たちの仏への帰依と供養】――

【一五八頁 八行】「すると**東方**の五百万億の国々の梵天王の宮殿も光が倍になって輝き、その梵天の王たちはこのように思いました。『これまでにこんなに明るく輝く光を見たことがない。／（『何の因縁を以て此の相を現ずる』）なぜこうした光景が現われたのか』と。そこで諸々の梵天の王たちが集まり、その理由を話し合いました。その梵天の王たちの中に**『救一切(くいっさい)』**という大梵天王がいたのですが、その大梵天王が偈を唱えて言いました。『これまでにない光明が我々の宮殿に照らし出された。なぜであろうか。おそらくは大変徳の高い天の神がお生まれになったのか、**【(偈)一五九頁 三行】**（『佛の世間に出（い）でたまえるとやせん』）または仏がこの世でお悟りになられたからに違いない。だから大光明が十方に普く照らし出されたのではあるまいか』と」

【一五九頁 五行】「その時、**東方**の五百万億という無数の国土の**『梵天王(ぼんてんのう)』**たち、それぞれの宮殿の中に入ったまま、捧げるための花を盛るお皿に天の花をたくさん積み上げ、光明が差してくる**西の方**へ飛んで行きました。するとそこでは**大通智勝如来**が菩提樹のもとにお座りになっており、その周りには諸々の天の神や鬼神、あらゆる人間、動物をはじめとする生きとし生けるものが取り囲んで仏さまを恭敬讃歎（くぎょう さんたん）している場面でした。そして**十六人の王子**たちが仏さまに法をお説きくださるようお願いをしているのです。すると**東方の梵天王**たちが仏さまの座に降り立ち、頭を地面につけて礼拝し、仏さまのまわりを百千回もグルグル回り敬う心を示しました。しかも天の花を降り注いで供養し、その花がこの世の中心にある最大最高の山**『須弥山(しゅみせん)』**の高さと同じくらいにまで積もらせて、深い帰依の心をあらわしたのでした。また、そばにある十由旬（ゆじゅん）という大変高い菩提樹にも供養し、それが終ると梵天王のそれぞれの宮殿を仏さまに捧げ、『私どもの宮殿をどうかお納めください』とお願いしたのでした」

【一六〇頁 一行】東方の梵天王たちは偈を以て、さらに一心に申し上げるのでした。

【(偈)一六〇頁 三行】「世尊は、なかなか世に現われ下さるものではありません。世尊にお会いできることは大変難しく稀有（けう）なことです。仏さまは計り知れない無量の功徳を具え、一切の者を救い切るお方であります。世尊は天上界・人間界の最高の大導師であり、世間の全ての者に対して憐（あわれ）みを限りなく注ぎ、お導きくださるお方です。そしてそれによって十方世界の全ての衆生は等しく大きな利益（りやく）を受けることができるようになりました。我々は五百万億というあらゆる国々から来た者です。／（『深禪定（じん ぜんじょう）の樂を捨てたることは 佛を供養せんが爲の故なり』）こうして天上界での穏やかな境地と生活を捨ててここに参ったのはほかでもありません。仏さまを讃歎（さんたん）供養し、仏さまのみ教えをうかがうためであります。私どもは前世において福徳を具えていたために、今世、こうして美しい宮殿を持つ身となりましたが、この宮殿をすべてお捧げします。どうぞお受け取りください」

【一六〇頁 終三行】「そして梵天の王たちは**大通智勝如来**を讃嘆し、『どうか教えをお説き下さって多くの人々を救い、悟りへの道をお開きください』と願うのでした」

【一六一頁 二行】この願いをお聞きになった**大通智勝如来**は、無言でうなずかれました。

【東南方世界で起こった『奇瑞』と梵天王たちの仏への帰依と供養】――

【一六一頁 二行】「すると**東南方**にある五百万億の国々の**『梵天王』**たちも、自分の宮殿がこれ

までにない大光明に輝き照らし出されたのを見て歓喜踊躍（かんぎゆやく）したのでした。そしてみんなが集まり、どのような理由でこの現象が起きたのかを話し合いました」

【一六一頁 五行】「その時**『大悲・だいひ』**という大梵天王が偈をもってみんなに言いました。

【(偈)一六一頁 七行】（『是（こ）の事（じ）何の因縁あって 此（かく）の如き相を現ずる』）『今まで我々の宮殿がこのような大光明に包まれたことはない。なぜであろうか。おそらくは大変徳の高い神がお生まれになったのか、／（『佛の世間に出（い）でたまえるとやせん』） または仏がこの世でお悟りになられたからに違いない。だから大光明が普く照らし出されたのではあるまいか。どうかみんなで一心になってその原因を探し求めようではないか。これから千万億というはかり知れない数の国々を旅しなければならないかもしれないが、この大光明の大本・根源を訪ねて行こう。おそらく仏が現われて、苦しむ衆生をお救いくださるに違いない』と」

【一六一頁 終行】「すると**東南方**の**梵天王**たちは、それぞれの宮殿に入ったまま、捧げるためにお皿いっぱいの天の花を盛って、大光明が差して来る**西北の方**へ飛んで行きました。するとそこでは**大通智勝如来**が菩提樹のもとにお座りになり、天上界・人間界の者たちや諸々の天の神、鬼神、あらゆる人間、動物をはじめとする生きとし生けるものが仏を取り囲んで恭敬讃歎（くぎょう さんたん）している場面でした。そして**十六人の王子**たちが仏さまに法をお説きくださるようお願いをしているのが見えました」

【一六二頁 三行】「それを見た**東南方**の梵天王たちは仏前に降り立ち、頭を地面につけて礼拝し、仏さまのまわりを百千回もグルグル回り敬う心を示しました。さらに天の花を降り注いで供養し、その花がこの世の中心にある最大最高の山**『須弥山・しゅみせん』**の高さと同じくらいにまで積もらせて、深い帰依の心をあらわしたのでした。またそばにある大変高い菩提樹にも供養し、それが終ると梵天王のそれぞれの宮殿を仏さまに捧げ、『どうか私どもを憐（あわ）れと思し召し（おぼしめし）て、この宮殿をお納めください』とお願いしたのでした。そして**東南方**の**梵天王**たちは一心に偈を唱えて言いました」

【(偈)一六二頁 終四行】「『聖者のなかの聖者、神の中の神である世尊よ。あなたは迦陵頻伽（かりょうびんが）のように美しい声で法を説かれたお方であり、一切衆生に憐みを捧げて下さるお方です。私たちはあなたを心から深く敬い礼拝します。／（『世尊は甚（はなは）だ希有（けう）にして 久遠に乃（いま）し一（ひと）たび現じたもう』） 世尊は極めて稀（まれ）なお方であり、久遠の時間を経て一度しか世にお出ましにならないお方であります。この百八十劫の長きにわたっても我々は仏にお会いすることはできませんでした。／（『三悪道（さんなくどう）充満し 諸天衆（しょてんしゅう）減少せり』） そのために地獄・餓鬼・畜生の三悪道（さんなくどう）に陥（おちい）る者が充満し、天界に生まれるような者は減少してしまいました』」

【(偈)一六二頁 終二行】「『今、仏さまがこの世にお出ましくださいました。／（『衆生の爲に眼（まなこ）となり』） 世尊は衆生に真理の眼（まなこ）を開かしめ、一切のものを救い護（まも）り、衆生の父として憐（あわれ）みを注ぎ、幸福の利益（りやく）をお与えくださるお方です。／（『我等宿福（われら しゅくふく）の慶（きょう）あって 今世尊に値（あ）いたてまつることを得たり』） 私どもは**前世から長い間、善行を行ってきた功徳のお陰で、今、世尊にお会いすることができました**。本当に有難いことです』と偈を唱えました。そして『願わくは世尊よ。一切のものを憐れと思し召しになり、我々に法をお説きくださり、悟りへとお導きください』と願うのでした」

【一六三頁 三行】**「するとさらに東南方の**梵天王たちは声をそろえ、偈を唱えて言いました。
【(偈)一六三頁 六行】「『世尊よ。どうか素晴らしい真理の教えをお説きください。諸法の実相をお示し頂き、苦悩する衆生を救い、大歓喜をお与えください。衆生が真理の教えを聞けば高い悟りを得、天界に生まれ変わることができ、／（『諸の悪道減少し 忍善（にんぜん）の者増益（ぞうやく）せん』） 悪道に陥（おちい）る者は減少し、善い行いをする者が増加することになるでしょう』」
【一六三頁 終四行】「これをお聞きになった**大通智勝如来**は、無言でうなずかれました」
【南方世界で起こった『奇瑞』と梵天王たちの仏への帰依と供養】――
【一六三頁 終四行】「すると**南方**にある五百万億の無数の国々の**『大梵天王』**たちも、自分の宮殿がこれまでにない大光明に照らし出されたのを見て歓喜踊躍（かんぎゆやく）したのでした。そしてみんなが集まり、どのような理由でこの現象が起きたのかを話し合いました」
【一六四頁 一行】「その時**『妙法(みょうほう)』**という大梵天王が偈をもってみんなに言いました」
【(偈)一六四頁 二行】「『我々の宮殿が大光明に包まれた。この瑞祥（ずいしょう）の理由をみんなで探し求めようではないか。我々がこの世界に住んで百千劫という長い時間が経ったが、この様な素晴らしい瑞相（ずいそう）が起きたことはない。おそらく大変徳の高い神がお生まれになったのか、／（『佛の世間に出（い）でたまえるとやせん』） または仏がこの世でお悟りを開かれたからに違いない」
【一六四頁 五行】「すると**南方**の五百万億の**梵天王**たちは、それぞれの宮殿に入ったまま、捧げるためにお皿いっぱいの天の花を盛って、大光明が差して来る**北の方**へ飛んで行きました。するとそこでは**大通智勝如来**が菩提樹のもとにお座りになり、天上界・人間界の者たちや諸々の天の神、鬼神、あらゆる人間、動物をはじめとする生きとし生けるものが仏を取り囲んで恭敬讃歎（くぎょう さんたん）している場面でした。そして**十六人の王子**たちが仏さまに法をお説きくださるようお願いをしているのが見えました」
【一六四頁 八行】「それを見た**南方**の梵天王たちはさっそく仏前に降り立ち、頭を地面につけて礼拝し、仏さまのまわりを百千回もグルグル回り敬う心を示しました。さらに天の花を降り注いで供養し、その花がこの世の中心にある最大最高の山**『須弥山(しゅみせん)』**の高さと同じくらいにまで積もらせて、深い帰依の心をあらわしたのでした。そしてそばにある菩提樹にも供養し、それが終ると梵天王のそれぞれの宮殿を仏さまに捧げ、『どうか私どもを憐（あわ）れと思し召し（おぼしめし）て、この宮殿をお納めください』とお願いしたのでした。さらに**南方**の**梵天王**たちは一心に偈を唱えて言いました」
【(偈)一六五頁 二行】「『世尊にお会いできるのは稀有（けう）の難事であります。世尊はあらゆる煩悩を打ち破ってくださるお方であり、百三十劫の長い年月を経てようやく今、お姿を拝することができました。世尊は心の渇きに苦しむ衆生に《法の雨》を降り注ぎ、潤（うるお）いで満たすお方です。三千年に一度花が咲く**《優曇波羅(うどんばら)》**の花のように、出会えるのは極めて稀（まれ）で、ようやく今日お会いすることができました。私どもの宮殿はこのように光輝いています。どうぞこの宮殿をお受け取りください』と」
【一六五頁 八行】「さらに**南方**の**梵天王**たちは偈をもって仏を讃嘆し、申し上げました」
【(偈)一六五頁 終行】「『ただ願わくは世尊よ。どうか法をお説きください。一切の天界の者や魔・善神・出家修行者・在家修行者が全て安穏な境地を得ることができるようお導き願います』」

【一六六頁 三行】「この偈をお聞きになった**大通智勝如来**は、無言でうなずかれました」
【西南方と下方の世界の梵天王が教えを希(こいねが)う』】――
【一六六頁 三行】「すると**西南方**と**下方**にあるそれぞれ五百万億の国々の**『大梵天王』**たちも、同じように**大通智勝如来**のもとに参集し、教えを希（こいねが）いました」

【上方世界で起こった『奇瑞』と梵天王たちの仏への帰依と供養】――
【一六六頁 四行】「またその時、**上方**にある五百万億の国々の**『大梵天王』**たちは、自分の宮殿がこれまでにない大光明に輝き照らし出されたのを見て歓喜踊躍（かんぎゆやく）し、言い知れぬ有難さを覚え、みんなが一堂に集まって、なぜこのような現象が起きたのかを話し合いました。そして集まった者の中に**『尸棄・しき』**という大梵天王が偈をもってみんなに言いました。
【(偈)一六六頁 終四行】「『なぜ我々の宮殿が大光明に包まれ、未だかつてない美しさを現したのであろう。この様にこれまでにない素晴らしい瑞相（ずいそう）が起きたのは、おそらく大変徳の高い神がお生まれになったのか、／（『佛の世間に出（い）でたまえるとやせん』）または仏がこの世でお悟りを開かれたからに違いない』」
【一六六頁 終行】「すると**上方**の五百万億の**梵天王**たちは、それぞれの宮殿に入ったまま、捧げるためにお皿いっぱいの天の花を盛って、大光明が差して来る**下方**へ飛んで行きました。そしてこの瑞相のもとを正すと、そこには**大通智勝如来**が菩提樹のもとにお座りになり、天上界・人間界の者たちや諸々の天の神、鬼神、あらゆる人間、動物をはじめとする生きとし生けるものが仏を取り囲んで恭敬讃歎（くぎょう さんたん）している場面でした。そして弟子となった**十六人の王子**たちが仏さまに法をお説きくださるようお願いをしているのが見えました」
【一六七頁 三行】「それを見た**上方**の**梵天王**たちはさっそく仏前に降り立ち、頭を地面につけて礼拝し、仏さまのまわりを百千回もグルグル回って敬う心を示しました。さらに天の花を降り注いで供養し、その花がこの世の中心にある最大最高の山**『須弥山・しゅみせん』**の高さと同じくらいにまで積もらせて、深い帰依の心をあらわしたのでした。そしてそばにある菩提樹にも供養し、それが終ると梵天王のそれぞれの宮殿を仏さまに捧げ、『どうか私どもを憐（あわ）れと思し召し（おぼしめし）て、この宮殿をお納めください』とお願いしたのでした。さらに**上方**の**梵天王**たちは一心に偈を唱えて言いました」

【(偈)一六七頁 終四行】「『誠に有難きことです。世を救う尊い世尊を拝見すると、苦しみの三界に閉じ込められている衆生を励ましながらお救いくださるのが目に見えます。一切を普（あまね）く智慧を具え、天上界・人間界で最高のお方である世尊よ。どうか衆生を憐（あわ）れと思し召し（おぼしめし）賜り、／（『能（よ）く甘露の門を開いて 廣く一切を度したもう』）甘露（かんろ）のような素晴らしい教えをお説き下さり、広く一切の者に**《救い・救われの門》**をお開きになり、悟りへとお導きください』」
【(偈)一六七頁 終二行】「今日までの長い間、世尊がおられないために空（むな）しく時を過ごしてきました。世尊がお姿を現されない前は、／（『十方常に闇暝（あんみょう）にして 三悪道（さんなくどう）増長（ぞうちょう）し 阿修羅亦（また）盛んなり 諸天衆轉（うた）た減じ 死して多く悪道に墮（お）つ』） この十方世界は暗黒で、地獄界・餓鬼界・畜生界の三悪道が勢いを増し、さら

には修羅界のように利己心と争う世界を含めた**四悪趣**(しあくしゅ)が盛んになり、善行を積んで天界へ昇るような人は極めて少なくなりました。そして悪業を積んだ者たちは死んだ後、再びこの四悪趣の世界へと落ちていくのでした」

【(偈)一六八頁 一行】「(『佛に従いたてまつりて法を聞かずして 常に不善の事を行じ 色力(しきりき)及び智慧斯(こ)れ等(ら)皆滅少す』) つまり仏に仕えず、**教えを聞くことができないために、常に善くないことばかりを考え、不善の行いをしているために、ついには自身の体力までも失い、智慧も失っていくのです**。／(『罪業(ざいごう)の因縁の故に 樂及び樂の想を失い 邪見の法に住して 善の儀則(ぎそく)を識(し)らず 佛の所化(しょけ)を蒙(こうむ)らずして 常に悪道に墮(お)つ』) ですから、悪業を積んでいくために幸福を失い、また真の幸福を願う心さえも失って行きます。しかも間違った考え方に固まってしまうために、善の見本を見ることもできません。こうして仏に教化されることがないために、常に悪道を歩み、悪の境地へと落ちて行くのです」

【(偈)一六八頁 四行】「仏は世の人々が正しい眼を開くために、久遠の時間を経て今、お姿を現してくださいました。衆生を愍(あわれむ)がために、／(『佛は世間の眼(まなこ)と爲(な)って 久遠に時に乃(いま)し出(い)でたまえり 諸の衆生を哀愍(あいみん)したもう故に世間に現じ』) わざわざ俗世間にお生まれになり、苦を超える**《真の悟り》**を開かれたのです。私どもにとっては本当に有難いことであり、喜びに堪えません。そして一切の衆生もまた、かつてない喜びに包まれています。私どもの宮殿は仏のお徳のお陰さまで大変美しく光っていますが、どうか私どものお心をお察し賜り、この宮殿をお受け取り願います」

【結願の文(けちがんのもん)**／普回向**(ふえこう)**】――**

【(偈)一六八頁 四行】「(『願わくは此の功徳を以て 普(あまね)く一切に及ぼし 我等と衆生と皆(みな)共に佛道を成ぜん』) **『願わくはこの功徳を普**(あまね)**く一切に及ぼして、私ども全ての衆生が、一人残らず同じく仏の境地に達するように、心から願うものであります**』」

【一六八頁 終二行】「**上方**の**梵天王**たちは偈を用いて仏を讃えたあと、**『真理の教え』**をお説きくださるよう、重ねてお願い申し上げたのでした」

【十方世界の梵天王たちの願いを受けて、大通智勝如来がいよいよ法を説く】――

【一六九頁 五行】「すると**大通智勝**(だいつうちしょう)**如来**は、以上の十方世界の**『大梵天の王』**と**『十六人の王子』**たちの願いをお聞き届けになり、／(『即時に三たび十二行の法輪を転じたもう』) その場で**『四諦の法門』**を三通りに説き分けられ法を説かれました。そのお説法は、あらゆる出家・在家修行者や天上界の者たち、そして鬼神・諸天善神にも説くことのできない尊いものでした」(『及び余の世間の転ずること能(あた)わざる所なり』)」

【一六九頁 七行】「この**『四諦の法門』**とは、―― 『苦を直視してその苦とは一体何なのかを諦(さと)り**《苦諦》**、その苦の真の原因は何かを諦(さと)り**《集諦》**、その苦が滅っした状態を諦(さと)り**《滅諦》**、そしてその苦を滅する道を諦(さと)る**《道諦》**の教え』でした」

【一六九頁 八行】「また**『十二因縁』**の教えを説かれました。この**『十二因縁』**の教えとは―― 『人は智慧が無いために本能の赴(おもむ)くままに物事を捉えてしまい**《無明》①**、したがって本能のままに行動をして**《行》②**。そうした本能の赴くままの行動を積み重ねていく結果、結局はその人の意識も歪(ゆが)み**《識》③**、目の前に現われる現象ばかりを

追い求めるようになってしまう《名色・みょうしき》④。そもそも人間は現象を感知する五官（眼・耳・鼻・舌・身）と、五官で感じ取ったことを知る能力（意）を持ち《六入・ろくにゅう》⑤、この六入がさまざまな現象に触れる《触・そく》⑥ことによって感受性《受》⑦というものを具え、現象を感じ受け止めることでその人自身のなかに、好き嫌い、愛憎の心を生み《愛》⑧、そしてついには、好きなことや愛するものだけを追い求めるようになり、好き嫌い、愛憎の心によって物事を判断し取捨選択するようになる《取・しゅ》⑨。つまり人間は物事を一様に《平等》に受け入れることは出来ず、常に《差別》する心がはたらくようになる《有・う》⑩。こうしたことを人生の中で限りなく行い続け、融和・調和することなく対立や争いを人生の中で繰り返し、そしてそれらの全ての《業・ごう》を背負って再び次の世に生まれ変わる《生・しょう》⑪。そしてまた同じように喜怒哀楽、苦悩の連鎖の人生を送り、徐々に老いが忍び寄って行き、ついには死を迎える《老死・ろうし》⑫。これが真理を知らない者の生き方なのである』。だからこそ人間は、この『十二因縁』の教えの一番初めに示されている《無明・むみょう》の存在であるという事実を思い知ること。つまりは『自分というものは【本能の赴くままに生きてしまう人間なのだから、真理の教えを体得し、《無明・むみょう》から脱しなければならない】』と強く決意することが大切なのである。つまり《無明・むみょう》を脱するとは、【仏の智慧を得る】ことで、この『十二因縁』が示す苦の人生から解放されるためには【仏の智慧を得る】ことだと知ることだ』という教えなのです」

【一六九頁 終二行】（『無明滅すれば則(すなわ)ち行滅す、行滅すれば則(すなわ)ち識滅す、～　生滅すれば則(すなわ)ち老死・憂悲(うひ)・苦悩滅す』）つまり、《無明・むみょう》を滅することができれば、次の《行》を滅することができ、《行》を滅することができれば、さらに次の《識》を滅することができ、それが順次滅していき、ついには《老死》の苦悩を滅することができるのです」

【大通智勝如来が法を説かれた後、人々が得た功徳】――

【一七〇頁 三行】「こうして**大通智勝仏**が、多くの人々のためにこの法門を説かれると、六百万億那由他（なゆた）というはかり知れない数多くの人々は、これまで自分が持っていた誤ったものの見方、考え方を改めました。そして無我になってこれらの教えを受け止めましたので、心の悩みが全て晴れて解脱することができ、そして数多くの神通力を具えるようになりました。そうして三度、四度とこの教えを説かれた時、ガンジス河の砂の数ほどの無数の衆生が、何ものにもとらわれることなく教えを信受し、心の解脱を得ることができました。そしてその後もはかり知れない無数の弟子たちが、教えを聞いて解脱を得ることができたのでした」

【十六王子が出家し沙弥(しゃみ)となる】――

【一七〇頁 八行】「この時、**十六人の王子**たちはまだ少年でしたが、その後、出家して沙弥（しゃみ）となりました。王子たちは教えを受け止める力が高く、智慧を具えていたのですが、それはなぜかと言いますと、前の世でも百千万億という数多くの仏にお仕えして修行し、仏の悟りを求めていた人たちであったからです」

【一七〇頁 終二行】「すると沙弥（しゃみ）となった**十六人の王子**たちが、仏に申し上げました。『世尊よ。ここにいる大徳を具えた無量千万億という数多くの声聞たちは、皆、迷いを離れた境地に達しています。どうか世尊よ。私どものために最高の悟りへ達する教えを

お説きください。私どもは共に一生懸命修行してまいります。仏の智慧を得たいという心を、皆等しく持っています。／（『深心(じんしん)の所念(しょねん)は佛自ら證知(しょうち)したまわん』） 世尊は私どもが何を願い、何を考えているか、私どもの心の奥底をご承知であります。どうか教えをお説きください』」

【父王も出家。そして十六王子の願いを受け、大通智勝如来がついに『法華経』を説く】――

【一七一頁 二行】「その時、この**十六人の王子**たちの出家に心を打たれた**転輪聖王**(てんりんじょうおう)が率いる八万億という数多くの家来たちが、自分たちも出家をしたいと申し出ました。すると王は、それを許しました。そこで**大通智勝仏**は、十六人の沙弥の願いを聞き入れ、二万劫という長い期間を経たあと、多くの修行者たちに**『妙法蓮華・教菩薩法・仏所護念』**という最高の教えを説かれたのでした」

【一七一頁 五行】「仏がこの教えを説き終えられると、**十六人の沙弥**は、仏の悟りを得るために教えを一心に受持し、それを繰り返し唱えて暗記し、徹底的に理解しました」

【一七一頁 七行】「こうして**十六人の菩薩沙弥**たちは教えをことごとく信受することができ、さらには多くの声聞たちも教えを信解することができたのでしたが、／（『其の餘(よ)の衆生の千萬億種なるは皆疑惑を生じき』） ほかの様々な人々のなかには教えを正しく理解することができず、疑惑や当惑（とうわく）を覚える者もたくさんいました」

【大通智勝如来が三昧に入ったのを受けて、十六人の沙弥が『法華経』を説く】――

【一七一頁 八行】「**大通智勝仏**は、八千劫のあいだ休むことなく教えを説き続けられました。そののち静かな部屋に入り、八万四千劫という長きにわたり三昧に入られました。すると仏が禅定に入られたのを見た**十六人の菩薩沙弥**は、今度は自分たちが法華経をとかなければならないと決意し、自らそれぞれお説法の座に着き、同じ八万四千劫の長い期間、広く出家・在家修行者のために**『法華経』**の教えを説きました。その法の説き方はそれぞれ機根に合せて教えを説き分けたのでした」

【一七一頁 終行】「**十六人の菩薩沙弥**は六百万億那由他恒河沙（なゆた　ごうがしゃ）という無数の衆生を迷いの世界から救い出し、**『示・教・利・喜』**の順序に従って仏の教えを受持するように導きました。その結果、全ての者たちに仏の悟りを求める心を起こさせたのでした」

【三昧から開けた大通智勝如来が、十六人の沙弥を讃える】――

【一七二頁 二行】「「こうして八万四千劫の長い時間を経て**大通智勝仏**は三昧を終え、静かに法座の場に着座しました。そして、あまねく大衆に向かって告げられました」

【一七二頁 三行】「『この十六人の菩薩沙弥は、まれに見る素晴らしい者たちです。／（『諸根通利(しょこん つうり)にして智慧明了(ちえ みょうりょう)なり』） 仏の教えを受け止める力、仏事に反応する力に優れ、且つ、仏の教えを完全に理解し、智慧を完璧に具えています。過去世において無量千万億というはかり知れないほどの仏を敬って供養し、そしてその仏のもとで修行し、善い行いを実践し、仏の智慧を受持してきました。そして仏の教えを多くの衆生に説いてきた者たちです。皆の者たちよ。この十六人の菩薩沙弥のもとに近づいて尊敬の念を示し、そして教えを聴聞（ちょうもん）して実践に励みなさい。なぜならば、諸々の声聞・縁覚・菩薩たちがこの十六人の菩薩が説く教えをしっかりと信じ、心に保

つことができたならば、必ず仏の智慧を得ることが出来るからであります』」
【一七二頁 終四行】「**大通智勝仏**は、さらに多くの出家修行者たちに告げました。『この十六人の菩薩は、常に自ら願って**妙法蓮華**を説きました、そしてそれぞれが教化した六百万億那由他恒河沙（なゆた　ごうがしゃ）という**無数の衆生が幾度となく生まれ変わっても、**／（『世世に生まるる所菩薩と倶（とも）にして』）**そのつどその菩薩のもとに生まれ合わせ**、その菩薩に仕えて教えを聞いて実践し、ことごとく信解したのであります。そのおかげで四万億というはかり知れない数の仏に会うことができ、しかもそれは現在にまで引き続き、そして今後とも尽きることはありません』」

【十六人の沙弥が仏となって各国で法を説く】――
【一七三頁 一行】「諸々の比丘たちよ。今こそ話しましょう。**大通智勝仏**の弟子である**十六人の沙弥**は全員が仏の悟りを得ることができ、十方の国々（宇宙のすべて）において現在も教えを説かれています。そして無量百千万という数知れぬ菩薩や声聞を弟子としています」
「そのうちの二人の菩薩沙弥は、**東方の国**（星）で仏と成り、一人は名を**『阿閦・あしゅく』**、国を**『歓喜国・かんぎ こく』**と言います。そしてもう一人は**『須弥頂・しゅみちょう』**と言います」
「また**東南方の国**では**『獅子音・ししおん』**と**『獅子相・ししそう』**と言います。
　南方の国には**『虚空住・こくうじゅう』**と**『常滅・じょうめつ』**の二人が仏と成って法を説きます。
　西南方の国には**『帝相・たいそう』**と**『梵相・ぼんそう』**の二人が仏と成って法を説きます。
　西方の国には**『阿弥陀・あみだ』**と**『度一切世間苦悩・どいっさいせけんくのう』**の二人が仏と成って法を説きます。
　西北方の国には**『多摩羅跋栴檀香神通・たまらばつせんだんこうじんづう』**と**『須弥相・しゅみそう』**の二人が仏と成って法を説きます。
　北方の国には**『雲自在・うんじざい』**と**『雲自在王・うんじざいおう』**の二人が仏と成って法を説きます。
　東北方の国には**『壊一切世間怖畏・えいっさいせけんふい』**が仏と成って法を説きます。
　そして（『第十六は我釈迦牟尼佛なり。娑婆國土に於て阿耨多羅三藐三菩提を成ぜり』）十六番目が**『釈迦牟尼仏』**で、**『娑婆国土』**で仏の悟りを得たのであります」

【過去世、釈尊が沙弥であった時、無数の人々を教化してきた】――
【一七三頁 終三行】「比丘たちよ。私が過去世において沙弥（しゃみ）であったとき、それぞれ無量百千万億恒河沙（ごうがしゃ）という無数の衆生を教化しました。なぜ教化したのかと言いますとそれは**『仏の悟り』**を得るためであったのです。その衆生のなかに、現世において声聞の地位であっても引き続き私の教えを聞いている者がいます。その者たちをも私は終始一貫して常に**『仏の悟り』**を得さしめるために教化しているのです。だからこそ仏の道を一生懸命精進しなさい。仏の教えは深遠であるために理解し難いものでありますが、**『仏の悟りを得よう』**と志を立てて、努力し精進をしなさい」

【『宿世の因縁』――過去・現在・未来で法を聞く者は、釈尊が直接教化した者】――
【一七四頁 三行】「（『爾（そ）の時の所化（しょけ）の無量恒河沙（むりょう ごうがしゃ）等の衆生は、汝等（なんだち）諸（もろもろ）の比丘及び我が滅度の後の未来世の中の声聞の弟子是（こ）なり』）**その時私が教化した無量恒河沙（ごうがしゃ）の無数の衆生というのは、ほかでもありません。今ここにいるお前たちであり、私**

が滅度した後の未来世において私の教えを学ぶ弟子たちにほかなりません」
【一七四頁 四行】「私が入滅した後の未来世において、私の弟子たちが教えを学ぶ機会がなく、菩薩としてのなすべき行法を知らないでいたとしても、自らの過去世における功徳によって安心の境地に達することが出来るでしょう。／（『而(しか)も彼(か)の土（ど）に於て佛の智慧を求め是（こ）の經を聞くことを得ん』）そして私が他の国で別の名前の仏に成っていたとしても、この人たちは**『仏の悟りを求める心』**を起こし、必ずや私の国土において法華経の教えを聞くことになります。**『仏の悟り』**を得るためには、全ての人を完全に救う教えによらなければ悟りを得ることは出来ません。他には無いのであります。仏がさまざまな教えを説くのは、一つの**『真理』**を人に応じ、場に応じて説き分けるためであって、それは**『方便』**に過ぎないのであります」
【(偈)一八〇頁 四行】（『我十六の數にあって 曾（かつ）て亦（また）汝が爲に説きき 是（こ）の故に方便を以て 汝を引いて佛慧（ぶって）に趣（おもむ）かしむ 是（こ）の本因緣を以て 今法華經を説いて 汝をして佛道に入（い）らしむ 慎んで驚懼（きょうく）を懷（いだ）くこと勿（なか）れ』）「こうして私が十六人の沙弥の一人であった時、私は皆さんのために教えを説いてきたのであります。ですから今世、様々な方便を用いて皆さんを仏の智慧へ導いているのです。このように過去世からの因縁があるからこそ、今、私は皆さんに最高の教えを説いているのであって、皆さんは何も遠慮し、尻込みをする必要はないのです」

【仏は滅度を前にして、真理を説く】――
【一七四頁 終四行】「諸々の比丘たちよ。如来は自らの入滅の時をあらかじめ知ることが出来ます。そして人々が心清らかであり、信心が固く、縁起の法則を深く理解して安穏の状態でいることを知れば、その時、如来は菩薩や声聞たちを集めて**『真理』**を説くのです。
　私たちが住む世界は、人と人、人と自然との関係によって成り立っているものであります。ですから、個人の救われだけを悟る声聞や縁覚の境地に達したからと言って、それで『完全な平安』を得たとは言えません。自分だけ救われても本当の救われは実現しないのです。／（『唯(ただ) 一佛乘をもって滅度を得るのみ』） **全ての人が救われ、すべての人が仏の智慧を得てこそ、本当の幸せが実現するのです**」
【一七四頁 終行】「比丘たちよ。よく聞きなさい。如来が説く**『方便の教え』**は、衆生の奥の奥の性質を深く知り抜いた上での教えです。つまり多くの人々が五欲の欲望にとらわれて次元の低いものの見方、考え方にとどまっていることを知っている上での教えなのです。ですから、その教えを聞く者は、心から**『方便の教え』**をしっかりと信受するのです」

【仏が衆生を教化する手順 ／『化城宝処の譬え・けじょうほうしょ の たとえ』】――
【一七五頁 二行】「たとえば、――― 五百由旬（ゆじゅん）という大変長い距離の険しい道がありました。その道は人里から離れ、多くの猛獣や毒蛇もひそんでいます。大変恐ろしい道です。水も草もありません。その険（けわ）しい道を貴重な財宝を求める一団が歩いています。そしてその一団の中に一人の導師がいました。**【(偈)一八〇頁 終三行】**（『強識(ごうしき)にして智慧あり 明了(みょうりょう)にして心決定(けつじょう)せり 險(けわし)きにあって衆難(しゅなん)を濟(すくう)』） その人は智慧を具え、道に明るく頭脳明晰（ずのう めいせき）な人です。決断力もあり心が揺（ゆ）らぐことがなく不動で、人を救う力を持っています。その導師と共にこの困

難な険（けわ）しい道を通り抜けようとする一団がいました」
【一七五頁 六行】「ところが、引き連れている人々はみんな疲れ、恐ろしい道のりに恐怖を覚えて弱気になっていました。そして導師に向かって言います。／（『我等疲極(ひごく)して復(また)怖畏(ふい)す、復(また)進むこと能(あた)わず。前路(ぜんろ)猶(な)お遠し、今退き還(かえ)らんと欲すと』）『もうダメだ。怖くて歩くことはできない。これから先の道のりはまだ遠く、これ以上歩き進むことはできない。引き返そう』と言うのでした」
【一七五頁 七行】「それを聞いた導師は人の心の内をよく知り得る人で、しかも時と場合にしたがって人々を巧（たく）みに導く手段を熟知（じゅくち）している人でしたので、この言葉を聞いて、心の中でこう思いました。**【(偈)一八〇頁 終行】**（『此の輩(ともがら)甚だ愍(あわれ)むべし　如何(いかん)ぞ退き還(かえ)って　大珍寶(だいちんぽう)を失わんと欲する』）『ああ、本当にかわいそうな人たちだ。もう少しのところで素晴らしい大きな宝を得ることが出来るのに、それを得ることなく諦（あきら）めようとしている。本当にかわいそうな人たちだ』と」
【一七五頁 終四行】【(偈)一八一頁 一行】「そう思った導師は方便の力・神通力を用いて、全体の道のりの中間点より少し先の所に、大きな都城（とじょう）を幻（まぼろし）として現わしました。その都城の中には立派な家々が立ち並び、周りには庭園があり、清らかな川があります。水浴をするための綺麗（きれい）な池があり、大きな城門を持つ宮殿のような建物です。そしてそこには多くの男女が住んでいます。そして導師は一同に向かってこう言いました」
【一七五頁 終三行】【(偈)一八一頁 四行】「『みなさん。もう恐れ、心配する必要はありません。また引き返す必要もありません。あの大きなお城は安全な所で、城に入って休みましょう。中に入りさえすれば安心でいられますよ。そして疲れを癒（いや）しましょう。体に英気を養い、それからみんなが欲する宝を取りに行って、そのあと家に帰ればいいでしょう』と告げました」
【一七六頁 一行】【(偈)一八一頁 五行】「すると疲れ切っていた一同は大いに喜び、『おお。こんな有難いことはない。この難儀（なんぎ）な旅路を終えて楽になれる』と言って、みんなは一斉（いっせい）にその城に入って行きました。そして一同は『やれやれ助かった。これで安楽だ』と思い、救われ切った気持ちになりました」
【一七六頁 三行】【(偈)一八一頁 六行】「しばらくすると、みんなの疲れがすっかり癒（いや）されたことを見て取った導師は、スッと幻のお城を消してしまい、一同に向かって言いました。『さあ、出発しましょう。宝はもうすぐそこです。今ここにあった城は、じつは私が仮に作ったものです。ここで一休みして、みんなの英気を取り戻すために作ったものに過ぎません。皆さんが行かなければならない本当の最終目的地は、直ぐそこです』と言って励ましました。」　　**――【化城宝処の譬え・けじょうほうしょ の たとえ】**

【衆生(凡夫)の心理 ／ 仏智を得るなど無理だと思う心】――
【一七六頁 六行】「諸々の比丘たちよ。如来の教化もちょうどこの譬えの通りです。
　如来はみんなの大導師であります。／（『諸(もろもろ)の生死(しょうじ)・煩悩の悪道、険難長遠（けんなん じょうおん）にして去るべく度（ど）すべきを知れり』）**さまざまな現象の変化にとらわれ、煩悩が生じるのは、いわばこの険しい長い道のりのようであり、それは必ずしも消し去ることが出来ないものであるということを如来は知っている**のです。ただ、究極の救いに導くために『心の平安』を得る解脱を説き、『よくぞ苦を滅することが出来ました。それは苦を滅

するための一つの修行を終えたにすぎないのです』と告げてあげるのです。『**真の救われ』を得る究極の道は、『仏の智慧』を得るほかにはないのです**。 ／（『若(も)し衆生但(ただ)一佛乘を聞かば、則(すなわ)ち佛を見んと欲せず、親近(しんごん)せんと欲せじ』）しかし、もし最初から『仏の智慧』を示すと、衆生はかえって怖(おそ)れをなし、または疑問を感じて仏に背を向けてしまい、教えを聞こうとする心を無くします。と同時に、次のように思ってしまいます。 ／（『佛道は長遠（じょうおん）なり。久しく勤苦（ごんく）を受けて乃(いま)し成ずることを得(う)べしと』） 『仏の智慧を得るなど、仏道の道のりははるか遠く長いため、そんな長い修行を勤めるなどとても無理だ』と途中で諦(あきら)めてしまうことにもなりかねません」

【一七六頁 終三行】（『佛是(こ)の心の怯弱(こうにゃく)下劣(げれつ)なるを知しめして、方便力を以て、中道に於て止息(しそく)せんが爲の故に、二涅槃(にねはん)を説く』） 「仏は、衆生がこのように弱々しい、低い心しか持っていないのを知っていますから、それを巧みに導くために修行途中の化城として《声聞・縁覚》の二つ安心の境地を説くのであります。そして衆生が教えの通り修行して《声聞・縁覚》の境地に達することが出来れば、その時、如来はこう告げるのです。『皆さんは自分の行っていることを正しく理解していません。あなた達の境地はもう少しで仏の智慧を得る境地に近いのです。如来はあなた達を導く手段として、／（『一佛乘に於て分別(ふんべつ)して三と説く』） ただ一つの**《真理》**を三つに説き分けて教えを説いたのであって、あなた達はその途中の境地にいるに過ぎないのです』と」

【衆生（凡夫）の心を見通した導師（仏）の絶妙な導き方】――

【一七七頁 二行】「ちょうどこの導師が、一行を休ませるために化城を現わし、みんなが疲れを癒し、元気を取り戻したのを見計らって『最終目的地の宝の場所は、もう直ぐそこです。この城は私が仮に作ったものに過ぎない』と告げるのと同じようなものです」

【一八二頁 一行】（『爾(しこう)して乃(いま)し大衆を集めて 爲に眞實の法を説く』） 「そして方便の教えによって人生の苦から解脱した者たちを集めて、私は最終的な**『真の救われの教え』**を説くのです。（『今汝が爲に實(じつ)を説く』）今こそ皆さんのために**『真理の教え』**を説きましょう。**諸法実相を知る仏の智慧を得てこそ、真の涅槃の境地に入ることができるのです**。／（『當(まさ)に大精進を發(おこ)すべし』）それを目ざして大精進の決意をしましょう。皆さんが一切の智慧を得て仏の本質を知ることが出来たならば、仏の悟りを得たことになります。／（『三十二相を具(ぐ)しなば 乃(すなわ)ち是（こ）れ眞實(しんじつ)の滅ならん』）そうなるとその証しとして仏の徳相の三十二相がその人の身に現われます。そうでなければ本当の涅槃を得たとは言えません」

【「仏さまの導きによる“安堵”を覚える」だけで、『仏の智慧の道』に入っている！】――

【一八二頁 終二行】「諸々の仏は世の大導師であります。諸仏はすべて衆生に安心を得させるために人生苦から救われる境地を説かれます。 ／（『既(すで)に是(こ)れ息(やす)み已（おわ）んぬと知れば 佛慧（ぶって）に引入（いんにゅう）したもう』） そして**人々がこの『安心の境地』であり、『人生苦から救われた』ということを実感できたならば、その時はじめてその人は真の救われである『仏の智慧』を得る道へと導かれるのであります**）」と世尊は説かれたのでした。

因縁周（いんねんしゅう）

(P225・ 1行／P171・1行)

この品から『授学無学人記品・じゅがくむがくにんきほん第九』までを「因縁周」と言って、過去世からの因縁を説くことによって、**「仏法は永久不変」**。**「人間はすべて平等で仏性をもつもの」**であること、したがって**「全ての衆生がいつかは仏の智慧に達することができる」**ことを教えられています。　※「**法説周**ほっせつしゅう」「**譬説周**ひせつしゅう」

『久遠（くおん）を観（み）ること猶（な）お今日（こんにち）の如（ごと）し』（一五四頁 二行）(P237・4行／P180・8行)

今日（きょう）をたいせつにせよ

(P237・終3行／P180・終3行)

われわれの修行というものは、過去から未来へと続いているものであります。～　したがって、もし今日のわが身・わが心・わが行いを**「濁(にご)す」**ようなことがあれば、かならずその**「下流まで濁り」**が及び、もしわが身・わが心・わが行いを**「清め」**れば、かならずその**「下流も澄(す)んで」**きます。

《思惟（しゆい）のひととき　①》

庭野開祖は**「今日のわが身・わが心・わが行いを清めれば、かならずその下流も澄んでくる」**と教えてくださっています。
　── 私たちは仏さまのみ教えを頂いたお陰さまで、「わが身・わが心・わが行いを清めることができる」ようになりました。有り難いことです。それでは… どれほど「自分が清まった」「人生が清まっている」か？を振り返ってみましょう。

『魔軍（まぐん）を破（は）し已（おわ）って阿耨多羅三藐三菩提（あのくたらさんみゃくさんぼだい）を得（え）たもうに垂（なんな）んとするに、而（しか）も諸佛（しょぶつ）の法現在前（ほうげんざいぜん）せず』（一五五頁 二行）

魔軍（まぐん）を破（は）するとは

(P243・終6行／P185・終3行)

魔軍というのは、人間の心の深層にひそむ迷いの集積であるとされています。

出家（しゅっけ）の意義（いぎ）

(P253・4行／P193・終5行)

出家の目的。これはあくまでも真理の追究のためでなければなりません。真理の追究に徹するためには、多かれ少なかれ俗生活を犠牲にしなければならなくなります。
　～　お釈迦さまの出家を**『大いなる放棄・ほうき』**と呼んでいます。

現代（げんだい）の出家（しゅっけ）

(P255・終5行／P195・5行)

人を幸せにし、世の中を幸せにするためには、多かれ少なかれ自分の五欲の楽しみを犠牲にしなければなりません。自分も精一杯官能を満足させ、そのうえで人をも救いたいというのは、むしがよすぎます。

在家の出家

(P256・終6行／P195・終2行)

人間みんながそこまで達することは不可能なことでありましょうが、**信仰者であるかぎり、少なくとも生活のある部分を自ら進んで犠牲にし、**大勢の幸福のためにはたらくことは**当然のことであります。**そしてそれは、誠に**「人間らしい、美しい行い」**なのであります。～　生活のなかにおいて、仏さまの教えをよく守って正しい生き方をすると同時に、ひと時、利己心を捨てて、なんらかの形で人のため世のための奉仕をする・・・ これが以前から私の主張する**「在家の出家」**にほかなりません。

《思惟のひととき　②》

> 庭野開祖は、在家信仰者の姿として、「仏さまの教えをよく守って、正しい生き方」をし、「ひととき、利己心を捨てて、人のため世のための奉仕をする」姿勢を当然の姿だと主張されています。
> **―― では、在家信仰者の私はこれまで、この「仏さまの教えをよく守って正しい生き方」をし、「ひと時、利己心を捨てて、人のため世のために奉仕する」ということを、どれほど心がけているでしょうか？　振り返ってみましょう。**

『衆生は常に苦悩し　盲冥にして導師なし　苦盡の道を識らず　解脱を求むることを知らずして　長夜に惡趣を増し　諸天衆を減損す　冥きより冥きに入り　永く佛の名を聞かず』(一五七頁　一行)

解脱を求むる

(P264・2行／P202・1行)

誰しも苦しみからは逃れたいのですが、「助かりたい」ともがくばかりで、どうすれば苦しみから解脱できるかという本当の道を求めようとしないのが、凡夫の姿です。

本当に苦しみから解脱する道は、心を改造し、根本の迷いを去るよりほかにないのですが、それを求めようとはせず、ただ目の前の苦しみから逃れることにあくせくしているのです。

《思惟のひととき　③》

> 苦しいことが起こった時、目の前の「苦」から逃れ、「苦」の解決を望むことは人間として当然です。しかし、「苦」の解決だけで終わらず、自らの「心の在り方」を改造し、本当の道を求めようとしている自分であるか？　振り返ってみましょう。

『業』は未来のためのもの

(P282・1行／P215・5行)

よい業を積めば積むほど、自分はよくなってくるのだという原理がわかりますから、これから大いに善業を積もうという決意が起こります。

『其の中の衆生各相見ることを得て、咸く是の言を作さく、此の中に云何ぞ忽ちに衆生を生ぜる』(一五八頁 五行) (P288・2行／P218・4行)

世界が明るくなったために、たくさんの人たちがいることがわかって来たというのです。これは、仏の教えのゆきわたらない所では、ただもう自分の「我」だけにとらわれて苦しんでいます。〜 **「諸法無我」**の教えがわかると、他人の尊さを認識し、深い仲間意識を感ずるようになります。したがって幸福な人間に変わってしまうのです。
「孤独地獄からの解放」です。

《思惟のひととき ④》

『其の中の衆生各相見ることを得て、咸く是の言を作さく、此の中に云何ぞ忽ちに衆生を生ぜる』の経文は、仏の教えに触れることによって自分中心の「我」に気づき、周囲との関係、つまり『諸法無我』の意味が解るということにほかなりません。
―― ではこれまでの信仰体験で、教えに触れることによって「自己中心の自分だった」、「まわりや相手の事に気遣いができなかった自分だった」ということを、気づくことがありましたか？ 振り返ってみましょう。

『深禪定の樂を捨てたることは佛を供養せんが爲の故なり』(一六〇頁 六行)

天上界での静かで安らかな生活を捨ててここに参りましたのは、仏さまに帰依と感謝のまことを捧げ、教えを頂くために来たのです。

創造が人生の喜び

(P297・終4行／P228・5行)

創造には必ず苦心がいります。苦労が必要です。ところが、創造の苦心・苦労は、積極的な苦心・苦労ですから、楽しみがそれに伴います。

『極樂百年の修行は穢土一日の功に及ばず』 **(報恩抄)**

《思惟のひととき ⑤》

庭野開祖は、**「創造には苦心・苦労が必要です。その苦労にも、①自分自身をより良い人間に高める『徳の創造者』という積極的な苦労と、②貧・病・争から逃れ、解決したいという消極的な苦労の二つがあります」**と説かれています。
―― では私は、自分の人生をこの①「積極的な苦労」と②「消極的な苦労」のどちらの人生を送ることを望むのか？ 考えてみましょう。

衆生の眼となる

(P313・3行／P241・7行)

『衆生の爲に眼(まなこ)となり』・・・大変いい言葉です。応身仏の教えの最大の目的は、衆生に本当の〈ものの見方〉を悟らせてくださることにあります。〜 それが根本の救いにほかなりません。

宿福の慶

(P314・2行／P242・3行)

仏さまに会いたてまつることができたのも、いままで善い行いをして徳を積んできたお陰であるというわけです。

『我等宿福の慶あって今世尊に値いたてまつることを得たり』(一六三頁 一行)

(P314・2行／P242・3行)

《思惟のひととき ⑥》

『我等宿福の慶あって今世尊に値いたてまつることを得たり』

―― この経文をかみしめてみましょう。

『佛に従いたてまつりて法を聞かずして 常に不善の事を行じ 色力及び智慧斯れ等皆減少す』(一六八頁 一行)　(P340・3行／P265・終3行)

仏に仕えて教えを聞くことが無いために、常に善くないことばかりを行い、そのために体力も智慧も減って行くばかりです。悪業を積んでいくために幸福を失い、また真の幸福を願う心さえも失って行きます。

『罪業の因縁の故に 樂及び樂の想を失い 邪見の法に住して 善の儀則を識らず 佛の所化を蒙らずして 常に惡道に墮つ』(一六八頁 四行) (P342・3行／P266・8行)

罪の行い繰り返すために幸福を失い、また真の幸福を想(おも)うことさえもなくなり、間違ったものの見方、考え方に固まってしまい、善の見本さえ見ることもできません。こうして仏に教化されることもなく、ついには悪の境地へと落ちて行くのです。

《思惟のひととき ⑦》

『佛に従いたてまつりて法を聞かずして 常に不善の事を行じ 色力及び智慧斯れ等皆減少す』
『罪業の因縁の故に 樂及び樂の想を失い 邪見の法に住して 善の儀則を識らず 佛の所化を蒙らずして 常に惡道に墮つ』―― の経文に触れ、あなたは何を感じ、どのような感想を持ちますか？　みんなで話し合ってみましょう。

『佛は世間の眼と爲って 久遠に時に乃し出でたまえり 諸の衆生を哀愍したもう 故に世間に現じ 超出して正覺を成じたまえり』(一六八頁 四行) (P350・1行／P272・6行)

結願の文

(P352・5行／P274・2行)

『願わくは此の功徳を以て 普く一切に及ぼし 我等と衆生と皆共に佛道を成ぜん』。

十二因縁

(P364・5行／P283・終3行)

根本仏教の大切な法門です。われわれ凡夫の肉体がどうして生まれ、成長し、どうして老死に至るかという因縁の関係を十二の段階に分けて説き、心の変化にもそれと同様な原因・結果の法則があることを説かれたものです。つまり、心を清め、迷いをのぞき、心身を正しい状態に修正するための根本的な原理を教えられたものです。

〈①無明〉 ⇒ 〈②行〉 ⇒ 〈③識〉 ⇒ 〈④名色〉 ⇒

智慧のないこと。人生の意義を知らず、また知ろうともしない状態。

過去世から、無意識のうちに行動し、真理にはずれた行動をしてきた。

真理にはずれた行動を無数に積み重ねることによって出来あがった物事を知り分ける力。

「名」は無形、「色」は有形。心身の作用。母の胎内の状態

〈⑤六入〉 ⇒ 〈⑥触〉 ⇒ 〈⑦受〉 ⇒ 〈⑧愛〉 ⇒

「名色」が発達して六根（眼耳鼻舌身意）が整った状態。

出生後、六根によって物事を知り分ける力が具わった状態。

物事を知り分け、好き嫌いの感情（喜怒哀楽）が起こる状態。

好きなものを欲し、愛着をおぼえる心のはたらき。

〈⑨取〉 ⇒ 〈⑩有〉 ⇒ 〈⑪生〉 ⇒ 〈⑫老死〉

愛するものをどこまでも追い求め、嫌いなものから逃げ出したいという心のはたらき。

「取」は人によって起る感情が違うため、人と自分との差が生じ他人と対立が生じる。

「有」によって生じる苦の人生は、次の来世の「生」においても、同じく展開される。

やがて「老」を迎え、そして「死」がやって来る。「老死」は凡夫にとって最大の苦。

貪欲・差別は新しい病気

(P379・終2行／P294・終5行)

妙法蓮華・教菩薩法・仏所護念

(P390・終3行／P303・6行)

〈妙法蓮華経〉 俗世にいながら、人格完成しつつ、世を完全平和する道を説く教え。
〈教菩薩法〉 菩薩を教化されるために説かれた教え。
〈仏所護念〉 仏が久遠の昔から護り念じてこられた、大切な法。

示・教・利・喜　(P400・終3行／P311・3行)

教えを説き、人を導いて行く合理的な順序です。

〈示〉第一に教えのあらましを示します。

〈教〉相手が「なるほど、良さそうな教えだ」と心を動かして来たら、もっと深く教えの意味を説いてあげます。

〈利〉教えの内容をほぼ理解できたと思われたら、次に、教えを実践して『利益・りやく』を得るように導きます。

〈喜〉そうなると人は、教えを保ち続けることに喜びを感じ、生きがいを覚えるようになります。

以上が、人を仏法に導く基本的な原則であって、この順序を踏んでいけば、まず間違いありません。　（それを忘れて、初信の人に教えの深い意味を詰め込むようなせっかちなやり方をすれば、畏れをなしてあとずさりをしてしまわぬとも限りません）

『第十六は我釈迦牟尼佛なり。娑婆國土に於て阿耨多羅三藐三菩提を成ぜり』

（一七三頁 終四行）　(P412・3行／P321・終4行)

『四部の衆の爲に廣く妙法華經を説き分別す』(一七一頁 終行)　(P397・2行／P309・2行)

縁に引かれて仏法を学ぶ　(P422・3行／P329・1行)

よりによって第一の〈大乗仏教国〉である日本に生まれたということが、まずもって大変な縁です。しかも、そのなかで諸経の王である『法華経』を学ぶようになったとなると、これはいよいよ〈有難い〉縁だと言わなければなりません。

『世世に生まるる所菩薩と俱にして』(一七二頁 終二行)　(P405・終3行／P315・終3行)

『爾の時の所化の無量恒河沙等の衆生は、汝等諸の比丘及び我が滅度の後の未來世の中の聲聞の弟子是れなり』(一七四頁 三行)　(P421・4行／P328・6行)

《思惟のひととき　⑧》

「私たちが仏の教えに入ったのは、なみなみならぬ縁によって入ったのです」、「よりによって、世界第一の大乗仏教国である日本に生まれたということは、大変な縁です」と庭野開祖は説きます。

―― では私がこうして、日本に生まれ、育ち。立正佼成会を通して仏法に縁を結ぶことができたことは、どういうことを意味するのか？ しかも、庭野開祖、庭野会長のご縁を頂いて法華経に巡りあえたことは、どういうことを意味するのか？

かみしめてみましょう。

『唯佛乗を以て滅度を得、更に余乗なし。』（一七四頁 終五行）（P429・終3行／P334・6行）

化城宝処の譬え

（P438・6行／P340・終3行）

『是の本因縁を以て 今法華經を説いて 汝をして佛道に入らしむ 慎んで驚懼を懷くこと勿れ』（一八〇頁 六行）（P470・2行／P368・2行）

昔からの因縁があればこそ、いま最高の教えを説いて、いよいよ仏の智慧へ入らしめようとしているのですから、決して尻込みすることはありません。

世のリーダーの資格

（P472・4行／P370・1行）

『強識にして智慧あり 明了にして心決定せり 險きにあって 衆難を済う』

（一八〇頁 終三行）

リーダーとしての三つの**「資格」**です。

〈強識・ごうしき〉 知識・経験が豊富。

〈明了・みょうりょう〉 賢明であること。

〈心決定・こころけつじょう〉 決断力がある。

仏道修行は人生修行

（P483・6行／P379・4行）

長い険しい道というのは「人生の旅路」です。その旅路は、辛いことに満ち満ちています。人間は誰しも「苦」を厭（いと）います。〜 なかなか望み通りに行かないのが憂き世（うきよ）の常です。〜 心配事や苦しみが、あとからあとから起ってきて、たえることがありません。〜 **仏道修行と人生修行とは別物ではないのです。われわれの日々の実生活が、すなわち仏道修行にほかならないのです。**

『既に是れ息み已んぬと知れば 佛慧に引入したもう』 （一八二頁 終二行）

そして人々が『安心の境地』であり、『人生苦から救われた』ということを実感できたならば、その時はじめてその人は真の救われである**『仏の智慧』を得る道**へと導かれるのであります。 （P481・3行／P377・終4行）

《思惟のひととき　⑨》

化城諭品の最後で釈尊は次のように説かれています。
『既に是れ息み已んぬと知れば 佛慧に引入したもう』
人々が『安心の境地』であり、『人生苦から救われた』ということを実感できたならば、その時はじめてその人は真の救われである**『仏の智慧』を得る道**へと導かれるのである。
―　つまり、信仰の初めでは「本質的な信仰・救われ」を知らなくて、単に自分自身の**『苦』の解決のための信仰**であったとしても、それによって『苦』が解決し、救われたならば、その人はすでに、**『真の救われである《仏の智慧》を得る尊い道に自然と導かれ、その道に入っていることになる』**のだと言えます。

この経文に触れ、あなたは何を感じますか？　感想を述べ合ってみましょう。

《思惟のふりかえり　まとめ》

今日の**『化城諭品』**の学びを通して、何を学び取ったか？
（または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか？）　振り返ってみましょう。

合　掌